

コリント人への手紙第二13章5節 「信仰の吟味」

1A パウロの語る「信仰」

1B 自分自身の吟味

2B イエス・キリストの福音

3B 他の福音

2A 内におられるイエス・キリスト

1B 聖霊の宮

2B キリストの住まい

3A 不適格者

本文

コリント人への手紙第二 13 章を開いてください、私たちはついに、コリント人への手紙の最後に来ました。午後に 13 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 5 節に注目します。「**あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。あなたがたが不適格な者なら別ですが。**」

1A パウロの語る「信仰」

パウロは、今、コリントにいる人々で一部、未だ悔い改めていない者たちに、最後の警告を与えています。パウロがコリントを立ち去った後に、争い、妬み、党派心、悪口、陰口、高ぶりなどが蔓延していました。また、淫らな行いや好色の問題もありました。それらについて、パウロは訪問をしたり、手紙を送って対処したことを思い出してください。多くの人たちは悔い改めました。けれども、そうではない者たちもいました。しかも、その高ぶった心は、偽使徒たちによって煽られていました。それで、パウロがはたして真正な使徒なのかどうか疑っていたのです。3 節には、「**こう言うのは、キリストが私によって語っておられるという証拠を、あなたがたが求めているからです。**」とあります。証拠を求めてくるので、パウロは自分を弁明せざるを得なくなっていったのです。

1B 自分自身の吟味

そこでパウロは、「**あなたがたこそが、自分自身を試し、吟味しなさい。**」と警告しています。パウロを試していて、吟味しているつもりなのですが、そうやっている彼らこそが、自分自身が信仰に立っているのかどうか、吟味しなければいけません。パウロは、コリントの人たちが自分自身を吟味しなさいという言葉、他にも語っていました。主のパンとぶどう酒にあずかる時に、自分自身を吟味しなさいと言いました。「**1コリ 11:21 しかし、自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。**」と言いました。

コリントの人たちは、党派心を持ったり、裁判で争ったりしていました。自分の知識を誇り、自由にふるまっていました。けれども、そこにはキリスト者としての基本を忘れていました。それは、「では、あなたがた自身はどうなのか？」という問いです。福音の始まりは、自分自身の貧しさ、霊的な貧しさを知るところから始まります。「マタ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」自分自身の心、または霊には、良いものが何もなく貧困状態なのだと知って、初めて真の幸せが訪れます。天の御国は、心の貧しさから始まるのです。

そこで、イエス様が言われましたね、「マタ 7:1-2 さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。2 あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」何かいろんなことが起こっていても、主が裁かれる方です。なぜならば、義なる方、正しい方は主お一人であられ、この方だけが正しく人を裁くことができるからです。ですから、私たちは、主ご自身に判断や裁きを任せていくという服従が必要になります。そして、なぜ、裁くことが間違っているのか？それは、神の領域に入るからです。人の命を取ることがなぜ、重罪なのか？それは、人のいのちを与え、それを取るのは神のみにその権利が与えられているのであり、人を殺すことは、神の領域を犯しているからです。同じように、裁くことも神の領域なのです。

裁くことに、あまり罪意識を感じないことが多いですね。なぜなら、高ぶっているからです。神のみが正しいのに、自分が正しいとしなければ人を裁くことができません。自分が正しいと思っているので、当然、罪を犯していると感じることが難しいのです。イエス様は、取税人や遊女、他の罪人のほうが、パリサイ派や律法学者のほうが、神の国に先に入っていることを語られました。なぜなら、パリサイ派や律法学者は、自分自身を正しいとしていたからです。だから、いろいろな罪の中でも、高ぶりは筆頭に挙げられます。

そして、イエス様は、人を正していく働きに携わるならば、まず自分自身を吟味することを教えられます。「7:3-5 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。4 兄弟に向かって、『あなたの目からちりを取り除かせてください』と、どうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。」兄弟の目に塵が見えて、それを取り除こうとするならば、自分自身の目に梁があるのだ、ということです。人を裁き、責め立てている人は、しばしば、本人がその責め立てていることを、相手の何倍も、同じことをやっていることが多いです。イエス様が、死刑であるという判決をユダヤ人の指導者たちが下しましたが、十字架刑に至るまでの間、彼ら自身が定めている掟をことごとく破っていました。これが、相手を裁く時に起こっていることで、自分自身が同じ罪を犯しているということです。

ですから、ここでイエス様が言われているように、自分自身の梁を取り除くこと、つまり、自分自

身を吟味することがいかに大切か、であります。これが、私たちが日々、行っていくことです。毎日、みことばに触れてください。みことばこそが、正しく、純粹です。「詩 19:7-8 【主】のおしえは完全でたましいを生き返らせ【主】の証しは確かだ浅はかな者を賢くする。8 【主】の戒めは真っ直ぐで人の心を喜ばせ【主】の仰せは清らかで人の目を明るくする。」みことばによって、自分自身を御霊が示して下さいます。主が自分自身を、御霊によって明らかにして下さいます。そのことを、素直に受け止めることです。

ここで気をつけなければいけないのは、自分で自分を裁かないことです。みことばでなく、主ご自身でなく、自分の感じていること、思っていることで自分自身を責めることです。自分自身を吟味しなさいと言っているパウロ自身が、自分自身を裁かないとまで言っている箇所があります。「Ⅰコリ 4:3-4 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。4 私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。」人の基準で裁くのは、相手に対してもしてはいけなだけでなく、実は自分自身もそうなのです。パウロは、さばく方は主ですと断言しています。他人にしても、自分にしても、主の公正な裁きに任せるのです。だから、みことばが大切になります。そして御霊による光が大切になります。このことによつてのみ、正しく自分を吟味することができます。

2B イエス・キリストの福音

そしてパウロは、「**信仰に生きているかどうか**」と言っています。ここで大事なものは、ここの「信仰」というのは、信じている状態のことを話しているのではないです。英語では、「the faith」となっていて、「ザ」が信仰の前に付いています。自分が信じているということ自体をパウロが問うているわけではありません。信仰の内容そのものを指しているのです。つまり、ここではこの手前にある、イエス・キリストの福音なのです。「Ⅱコリ 13:4 キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられます。私たちもキリストにあつて弱い者ですが、あなたがたに対しては、神の力によってキリストとともに生きるのです。」キリストが十字架に付けられ、そして神の力によってよみがえられた、ということ、その福音が、ここで言っている「信仰」です。

キリストの十字架とその復活を信じているのであれば、その人は、自分の古い人は死んでおり、キリストにあつて新しいのちに歩んでいることを知っているはずで、この中に本当に生きているのであれば、です。「ロマ 6:6-8 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだを滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。7 死んだ者は、罪から解放されているのです。8 私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることもなる、と私たちは信じています。」ですから、自分が罪に対して死んでいるとみなし、キリストにあつて神に対して生きているということ、この中に生きているか？ということなのです。

3B 他の福音

パウロは、彼らが、「11:3 キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。」と言っていました。偽使徒たちによって、彼らが汚されてしまうのではないかと考えていたのです。なぜなら、偽使徒たちは、こんなことをしていたからです。「11:4 実際、だれかが来て、私たちが宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいは、あなたがたが受けたことのない異なる霊や、受け入れたことのない異なる福音を受けたりしても、あなたがたはよく我慢しています。」彼らは異なる福音を語っていました。別のイエスを宣べ伝えていました。そして、人々は、異なる霊を受けたりしていたのです。

ですから、ここがとても気をつけなければいけないことです。信じていると言っても、はたして、イエス・キリストの福音を信じているのか？ということです。イエスと言っても、果たして、パウロたちが宣べ伝えたイエスのことを言っているのかが、試す必要があるのです。信じている、というだけでは足りないのです。何を信じているのかが、死活的です。

イエス・キリストの福音、その十字架と復活を信じているはずなのに、なぜ、そこから実が結ばれないのか？だから、信仰の中身が違うのではないのか？例えば、過去に洗礼を受けたということで、自分はクリスチャンであると思いついでいられないか？過去の洗礼の行為に信仰を置いているけれども、今、イエス・キリストの十字架の死によって、罪に対して自分が死に、よみがえりによって、自分も新しい歩みをしているということは、どこかに追いやられていられないか？自分が聖書の知識があるから、クリスチャンだと思いついでいられないか？聖書の知識はあるのに、争い、妬み、党派心、悪口、陰口、高ぶりがあるのはなぜか？その知識を信仰していても、イエス・キリストの福音に信仰を置いていないのではないのか？このように信じていると言っても、他の何かに実は、信仰を置いていて、イエス・キリストの福音の中にいないということが問題なのです。

2A 内におられるイエス・キリスト

そして、「**それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。**」と言っています。

1B 聖霊の宮

イエス・キリストご自身が内におられる、という真理があります。イエスご自身は、よみがえられてから、天に昇られ、神の右の座に着いておられますが、もうひとりの助け主、聖霊を遣わして下さり、そして、この方が私たちの内に住んでくださいました。「1コリ 6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住んでおられる、神から受けた聖霊の宮であり・・・」とあります。そして、聖霊が住んでくださることによって、イエス・キリストが住んでくださっています。「ロマ 8:9 しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。」

キリストが内に住んでくださる、という、とてつもないことが、御霊が住まわれることによって、真実となったのです。

2B キリストの住まい

主イエス・キリストが住まわれているのです。パウロは、エペソの人々に、「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」と祈っています(3:17)。既に住んでくださっているのですが、その住まわれていることを、しっかり信仰を持って受け止めてくださいますようにと祈っているのです。

主が住まわれているのであれば、同じところに、私たちは汚れや好色、乱れな行いを入れることができるでしょうか？それは、その汚れとキリストを同じところに入れることに他なりません。パウロは、このことを、遊女のところに通っているコリントの人たちに問いかけました。「I コリ 6:15-16 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。」主がうちに住んでおられることを知っているならば、今、コリントの人たちが悔い改めないで、淫らな行いや好色を行っているということはできないはずです。

ここで大事なのは、罪を犯したということと、その罪に留まり続けるということの違いです。罪を犯してしまうということは、キリストを信じる者にもあります。ヨハネの第一の手紙で、罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とすることになる、と言っています(1:10)。ですから、罪を全く犯さないということではありません。けれども、神は光であられ、神と交わりがあるならば、闇の中を歩むことはできません。そうしても偽っているのです。罪を犯してしまっても、罪を悔い改めないままではいけないのです。パウロはすでに、二度、訪問をしています。悔い改めて、実を結ばせていなければならぬはずなのです。そうした実が結ばれていないということは、キリストが自分の内におられることを自覚していないということなのです。

3A 不適格者

そして「あなたがたが不適格な者なら別ですが。」と言っています。つまり、自分自身が試されて、その信仰が実は、本当にはイエス・キリストに対する福音にはなかった。教会にはいたけれども、実は本物の信仰者ではなかった、ということでもあります。こんなにも悔い改めがなく、変化がないのであれば、それは、本人が実は初めから、信仰を持っていなかったということです。彼らは、パウロのことを不適格であると言いましたが、彼がそうやって裁いている中で、自分たちがキリストに属していないので、そのような勘違いをしているということです。

以前も分かち合ったことがあります。カルバリーチャペル・コスタメサに訪問した時です。その時、グレッグ・ローリーさんによる伝道集会在毎週、月曜日、教会で持たれていました。元気のよい賛美がありました。彼が、まっすぐに福音を語りました。私は少しずつ、気が沈んできました。なぜ、そんなに罪人であることを強調するのだろうか？悔い改めを強調するのだろうか？私はクリスチャンだから、そんなに罪、罪と言わないでほしい、と心の中で思っていました。

ところが、とんでもない勘違いをしていることに気づいたのです。自分自身が罪を悔い改めて、キリストを信じる信仰に立っているはずなのに、いつの間にか、自分自身が受け入れられることが目的になっていたのです。へりくだって、自分を捨てて、イエス様を自分の主として迎え入れて、この方に生きていくのに、自分のしていることが認められていくことが目的になっていたのです。信じているつもりなのに、信仰がキリストではなく、自分になっていたのです。自分を信じていて、キリストを信じているというようになっていなかったのです。もちろん、聞かれたらキリストを信じています、と答えたことでしょう。けれども、立っているところが、いつの間にかずれていたのです。

これが、「**信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。**」ということです。コリントの教会の人々のように、肉の行いがいろいろあって、その渦中において、いつの間にか、その純真な信仰から離れてしまっていることがあります。絶えず、主の前に出て、みことばに聞いて、御霊によって自分を探っていただく必要があります。その信仰からは、必ず実が結ばれます。自分がキリストの似姿に変えられて行きます。